

出所して丘を越えて港まで行軍。日の丸を立てた船が見えたときのうれしさ。船の上で名前を確認されてタラップを登った。白衣の看護婦さんや船員さんの「ご苦労さまでした」の声に迎えられ、涙で目の前が何も見えなくなった。船は朝嵐丸であった。

## シベリア抑留

岡山県 田中 一司

帰国後四十余年、シベリアの悪夢も遠い思い出となっている今であるが、三年間の捕虜生活の細かいことは忘れたが、苦しかったことは決して脳裡から消えない。強く心に残っていることを書き述べてみたい。

終戦後十月、ソ連軍警備の中で満州鞍山昭和製鋼所の解体輸送作業は一か月余りで、我が部隊は鞍山の某小学校に集まった。ここで食糧、衣類を各自背中に担いで駅に着いた。

十一月初めの夕方、貨車一両に八十人乗車して出発、

列車は奉天駅に着いた。下車して飯盒炊さんを行った。ところが、約五百人が脱走した。これ以後貨車の戸は絶対開かせない。食糧受領のときだけ警備兵が付き添った。貨車がとまると満人婦女子がたくさん食べ物を持って集まり、兵隊は貨車に横穴をあけ物々交換をしてにぎわった。ハイラルにおいて日本警察官を捕らえ員数外ができたので警備がゆるんだ。

貨車の中にたくさん板が積まれており、二階をつくって八十人がどうにか足を伸ばして寝られるようになった。缶詰の空き缶を利用して飯を炊き、空腹をしのいだ。便所は貨車の後部の床を切り抜き天幕で囲いをつくった。狭い貨車でのお楽しみは、将棋、囲碁、歌など思い思いに過ごした。私はロシア語の勉強をしたが、作業など大いに役立った。

貨車の屋根には常時監視兵が歩き回り、小窓から頭を出したりするとすぐ銃殺した。

約二千人を乗せた貨物列車は鞍山を出発し、バイカル湖畔を経由し中央アジアを南下し、タシケントから山脈の斜面をあえぎながら登り十二月中旬アンダレー

ンに着いた。一か月半もかかった。この地はソ連の刑務所二、捕虜収容所三、原住民と刑を終えた人たちが住む小さな町である。近くに見える山なみは天山山脈の西の果て、東の山の向こうは中国、南の山の向こうはアフガニスタンである。

真冬には深い雪で零下三十度まで下がり、防寒服を着ていても常に動いていないとだめで、真夏では暑くて直射日光の中ではとても立っておれない。三年間の捕虜生活、(強制)労働の苦痛は大きく、帰国の日を一日千秋の思いで十年ぐらいいも過ごした感じであった。

収容所は約八百メートル四方で二重の有刺鉄線で囲まれ、四隅に監視所があり、とても脱走できない。作業隊員の幕舎は横六メートル、縦四十メートル、高さ三メートルばかりで、トンボの羽根のように上下で四人の寝台が並び、一幕舎に二百人、中央にストープがある。本部、医務、炊事、集会所、中央出口に守衛所がある。幕舎の天幕は日本製である。

食事は食堂で、朝食は黒パンとスープ、昼食はひき

割りのおかゆ、夕食は麦のひき割りご飯とキャベツなど野菜の油煮。ときどき乾燥リンゴ、小魚で、とても重労働ができる食事ではない。

夜には南京虫に責められ安眠できず、まことに苦痛の連続である。

強制労働の作業内容は、私の関係したものを中心に挙げてみると、①住宅建設では土れんがづくり、穴掘り、大工仕事、屋根づくりなど、ノルマが高く平均五〇パーセント。②セメント工場建設では工事外郭づくり、旋盤、かじ屋、熔接、鉄板切り、水道と給水塔づくり、機械据えつけ等技術面では平均一八〇%の好成績であるが、石炭積みおろし、石炭岩、ねん土積みおろしは平均五〇%ぐらいである。③河川作業はとても困難で成績が上がらない。冬期は凍結して土が掘れない。川の下に無尽蔵に無煙炭があるので新しく川をつくる工事はノルマが厳しく、パンの量も少ない。空腹を満たすため、野ニンジン、野ごぼう、おぼこ、蛙、蛇など食べられそうなのは手当たり次第取って食べた。毒草を食べて死んだ者もあった。

私は主としてセメント工場作業であった。百二十余人の作業隊長として各部面で下手なロシア語で監督と交渉したが作業が進まず、部品がなかつたり、設計圖どおり組み立ててないと叱られたり、頭を悩ますことがたびたびであった。我が隊員には技術専門家がいたので、彼らを信頼し励まし合つて難工事を切り抜けることができた。

石炭を粉末にして噴射点火の調子もよく、石灰岩を牛乳状になるまで砕いたりませたりする工程も調子よく、いよいよ傾斜した直径二・五メートル、長さ三十メートルの鉄筒（中にらせん状のみぞ）の中に、筒の上部から石灰岩（乳状）を流し下部から石灰（粉末）を噴射点火すれば、静かに回転する鉄筒の中に焼けた石灰岩が豆つぶほどになって流れ出る。一同これを見て歓喜の声を上げた。これから種々の工程を経てセメントになる。わが隊員はセメントを手に乗せ、苦しかつた二年余の作業をしのび、むせび泣きをした。

共産主義教育のオルグには要領よくわかつたふりをして、作業に精を出した。

第二次帰還者が発表され、私もその中であつた。死んだ戦友と残つた人にお先に済まないという気持ちで涙ながら帰つた。

ナホトカでは身体検査、思想調べがあり、残留した者もあつた。緑の祖国日本が見えたとき、とめどなく出る涙を抑えられなかつた。

## ソ連抑留体験記

静岡県 林 順 一

悲しい思い出

負けを知らなかつたこの国にも敗戦という悪魔が迫つてきたのが昭和二十年八月十五日である。これを知つたときは、私たちの目の前が真つ暗くなつてしまつた。

この日から何が何だか理解できないうちに我が独立第十五飛行団司令部の者は鞍山神社に集結した。司令部以下各隊の将兵の中には、周囲の山岳地帯に逃れて立